

『神内喬本文集』に見る幕末讃岐の医学

太田 剛

抄録

讃岐国三木郡井戸村高木に生まれた医師 神内喬木（一八一七～九三）は、備前金川の難波抱節に医学を学び、高松藩儒の片山冲堂に漢文学を学んだ。藤澤東峯の古文辞学の学統に在る人物である。喬木が遺した六十四篇の漢文『神内喬本文集』は、地方史と医学史の多くの重要情報を提供している。喬木は嘉永三年（一八五〇）に抱節の次男玄貞が持ってきた種痘法を讃岐に広めた。その普及に当たっては、人々からの大きな抵抗に苦労したが、医師としての強い使命感をもつてそれを推進し、さらにコレラとも闘った。彼は文学の力をよく理解し、多くの文人から集めた良質な漢詩文を子供の教育にも活かした。その効果もあつて長男の堅爾は地元の鰐河神社の神官に、次男の由己は東京大学医学部を卒業して讃岐初の医学士になり、日本医学の中枢人脈を得たが、残念ながら結核で早世した。医療に強い愛の力と臨機応変の柔軟な対応を重視する喬木の哲学は、コロナ禍と闘う現在の日本に一つの道しるべを提供している。

キーワード：種痘法、医学史、幕末讃岐、漢文、古文辞学、文学の力

はじめに

平成十九年（二〇〇七）から徳島県に移住し、旧阿波藩の領地であった、阿波国（現 徳島県全域）と淡路国（現 兵庫県淡路島全域）、また隣国として関係の深かった讃岐国（現 香川県全域）を中心に、書道資料の収集・解説・論文作成に取り組んでいる。

平成二十五年（二〇一三）に、香川県木田郡三木町の神内國榮氏と知り合い、彼女の先祖の一族であり讃岐初の医学士となった神内由己（一八五八～八六）の顕彰会に加わった。この会は由己の業績の解明が主目的である。

その会では香川県医学史研究の大家である西岡幹夫先生、日本の医学史研究の権威である酒井シヅ先生、神内家の親戚で林董の後裔である林纈治先生などともお会いして、資料提供を受けることとなった。

平成二十八年（二〇一六）二月には、高松市歴史資料館の第七十回企画展「讃岐医人伝―合田求吾から柏原謙益・神内由己まで―」にて、その調査結果の一部が公開された。私はその調査段階で、由己の父親である儒医の捨蔵（号は喬木）の筆書きの漢文集の撮影データを頂き、解説を依頼された。これはこれまで活字化して公開されたことがない。大量の難解な漢文であり、時間をかけて少しずつ解説した。全部で六十四篇の文章があり、

そのうち二篇のみは一部を紛失しているが、読み進めるうちに、それがたいへん興味深い内容で、しかも讃岐の幕末の地方史や医学史の重要情報が盛り込まれていることがわかってきた。喬木が漢学の恩師である片山冲堂とも極めて昵懇な上に、その業績は想像以上に大きいことに驚いた。

平成二十八年秋には、約三年間をかけた全篇の訳注が終了した。その後、神内家にある関連資料の他、地域にある石碑や関連作品も解説し、その内容紹介を加えて令和二年三月末にB5版三七〇頁で出版したのが、『幕末讃岐三木の種痘医の遺稿 神内喬木文集』である。（後に『幕末讃岐の種痘医 神内喬木文集』と改題）。

出版後の令和二年十月には、四国大学学際融合研究所言語文化研究部門の例会と、高松市歴史資料館の「讃岐村塾歴史講座」にて、この概要を発表する機会を得た。

この『神内喬木文集』の内容は膨大なので、今回その中で医学に関する部分五篇のみを抜粋して一つの論文に作り替え、学際融合研究所の研究紀要に投稿するものである。

I 神内喬木とその子孫

1. 神内喬木（じんないきょうぼく）

文化十四〜明治二十六（一八一七〜九三） 七十七歳。

讃岐国三木郡井戸村高木の生まれ。名は謙、通称は捨藏。号は住宅のある高木の文字を一部変えて「喬木」とした。医師又玄の嫡子。医を業とした。暇時に詩文をよくした。二十歳頃、備前金川の難波抱節に医を学び、嘉永三年（一八五〇）に抱節の次男 難波玄貞が持つてきた種痘法を讃岐に広めた。安政五年（一八五八）頃から片山冲堂に儒学を学ぶ。（それ以前から冲堂の父親の片山恬齋にも学んでいたと思われる。）また、同じ年に珍しい形状の石を拾うと、それを画師に描かせてから、多くの学者文人

に頼んでその画にちなむ寿言を集め、屏風に仕立てて子供の教育に役立てた。

二男二女あり。長男 堅爾が高松藩医谷本雲斎を継ぎ、次男 由己が嗣子となり、長女 千代は多田家に嫁ぎ、次女 シゲは三谷謙山に嫁いだ。しかし由己が東京に出て全国的に活躍すると、堅爾が実家に戻り家を嗣いだ。喬木は由己が東京で学ぶ資金捻出のために、土地の一部や道具類を売却するなど教育に熱心であった。喬木は本来漢方医であって漢方の知識が極めて豊かであるが、天然痘やコレラとの格闘の中から漢方の限界に直面し、新しい医学を勉強しなければならないという意識を持った。それを最終的には子供たちに託し、由己の大学東校（後に東京医学校、さらに東京大学医学部に改称）への入学につなげた。晩年まで地域の医師として活躍し、寺子屋も開いて教育にも携わった。万延元年（一八六〇）、『改正農家撰種録』に序文を書いている。著に『神内喬木文集』がある。酒を飲まず茶を好んだ。妻キセは明治元年（一八六八）十月十八日没の享年四十七。



神内喬木の墓（三木町）

2. 神内堅爾（じんないけんじ）

嘉永元〜大正十（一八四八〜一九二二）七十四歳。



神官正装時の神内堅爾

名は堅爾、字は仲輔、号は篤斎、通称は市蔵。神内喬木の長男。高松藩医谷本雲斎に医学を学んでいたが、慶応四年（一八六八）二十一歳のとき、雲斎に認められて養嗣子として谷本家を継いだ。その後、岡キチと結婚する。しかし、諸般の事情により明治三年（一八七〇）に藩の洋学校を退学し、明治五年（一八七二）からは、軍人となって佐賀・熊本・鹿児島・台湾に出兵した。明治十四年（一八八二）には、後備役となつて谷本家に戻っていた。しかし弟の由己が東京に出て全国的に活躍するようになると、明治十六年（一八八三）九月、実家に戻り神内姓に復して、自分の長女マスを谷本姓とし、神内喬木が隠居して堅爾が家督相続した。明治十八年（一八八五）に重病の由己を高木の実家に呼んで養生させ、翌年に亡くなるまでキチが面倒をみた。堅爾が実家に戻つてからは、役場の衛生係や教員を担当して地域に貢献した。それが認められて明治二十八年（一九〇五）、現三木町の鰐河神社宮司を拝命し、同三十二年（一九〇九）に現さぬき市長尾名の宇佐神社宮司も兼任した。

3. 神内由己（じんないゆうき）

安政五〜明治十九（一八五八〜八六）二十九歳。

神内喬木の次男。墓碑に記載された享年によれば生年が嘉永七年（一八五四）となるが、当時は学校への入学を早めるために、名目上の生年を変えることがあった。幼い頃から優秀で、十一歳で藩校「講道館」洋学寮に入って英語を読み、柏原謙好、謙益の親子に医学を学んだ。明治三年（一八七〇）、柏原謙益が中心となつて御坊川で牡馬の解剖をした時は、器械係として参加している。四年（一八七二）、東京に遊学して大学東校に入り、官費生となり医学に従事した。十年（一八七七）、大阪陸軍臨時病院に勤務し、学課卒業後は、大阪府病院教授掛・府立一等医学校教頭・府立病院副長・府立医学校長などを歴任した。しばしば肺病を患い、明治十七年（一八八四）四月、職を辞して本格的に湯治をした。多少回復後に熱海の「鳴汽館」浴場医長になつて、「浴場試験法」と「洋製六角桶」等造つた。十八年（一八八五）、病状が再発し職を辞して郷里に帰り、実家の世話になつて様々な方法で養生を試みたが効果は無く、惜しまれつつ亡くなった。

由己は東京大学医学部卒業後に、蘭方医林洞海の四女（ナミ）を娶つた。ナミの義兄弟には、榎本武揚・赤松則良・圖師民嘉・林董、親戚には佐藤



神内由己肖像画
（神内家蔵）

泰然・佐藤尚中・松本良順・緒方惟準・西周・森鷗外などの著名人が多い。
ナミは一人の娘（ミツ）を遺して亡くなり、再び陸軍二等軍医 山田弘の娘（ノブ）を娶ったがやはり先に亡くなった。実はその間に、東京大学医学部総理 池田謙齋の妻の妹（キネ）を娶ったが、性格不一致のため八ヶ月ほどで離婚した。由己の娘（ミツ）は母方の林家に引き取られて東京麹町で育ち、成長後に赤坂の阪川牛乳（東京初の牛乳屋）の阪川霽（せい）に嫁いだ。由己の著書に『医家袖宝』『微毒新論』がある。

4. 神内文一（じんないぶんいち）

明治三十六〜平成二（一九〇三〜九〇）八十七歳。

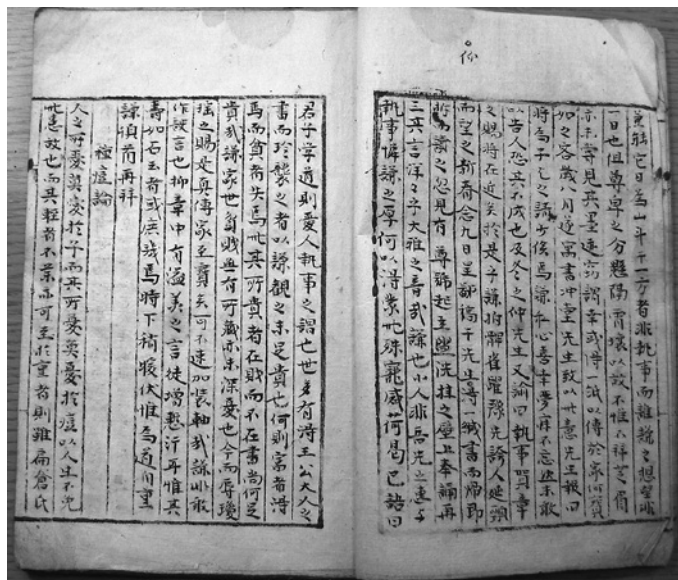
木田郡三谷村で三百五十九戸のための神職を担当していた林田松次の三男に生まれ、幼時より国学を学び、満十五歳六ヶ月にして皇典講究所学階試験に合格し、学階司業証書を受けた。以来、三谷郷社八幡神社に奉仕し、大正十年（一九二一）、神内堅爾の娘である神内ナヲと結婚して養嗣子となった。十四年（一九二五）、鰥河神社の宮司となって諸殿改築に着手。昭和五年（一九三〇）、神殿を竣工した。六年（一九三一）、社前の橋を鉄筋コンクリート製に架け替えた。同時に東奔西走して京阪からも寄付を募り、区画整理して神社を囲む玉垣を整備した。これによって、交通・風致・社殿すべて完璧な神社となった。文一は後に同じ三木町内の白山神社の宮司も兼任した。神内國榮氏の父親である。

Ⅱ 『神内喬木文集』 訳注

1. 種痘論

人々所愛莫愛於子、而其所憂莫憂於痘。以人生不免此患故也。而其輕者不業亦不至於重者、則雖扁倉氏^①復起未如之何也已。医雖小技亦仁之術也。無惻隱之心^②而可乎哉。西洋医某^③深悲人子多死於痘欲為極之苦心有年焉。

偶然有一牛水疱似痘者試取而種之人。自起脹灌膿至取膿。不異于天行^④者而畢生無復有痘患。自後輒種四方人子死於痘者絕少。可謂千古^⑤奇術也。術伝于吾邦今已十有餘年而專施之者水野^⑥日野^⑦椿方氏^⑧等是也。椿方氏与吾難波翁^⑨善、数称其奇勸之翁々不信。会中備足森侯^⑩召椿方氏令播種于境内、帰路過難波氏苦勸不已、乃翁試之百発百中。翁抵掌称善、椿方氏亦叩其兩端而謁^⑪焉。是吾難波氏種痘之權輿^⑫也。余又受而施之始也、人多疑之經年之久奏功愈多乃翕然^⑬信、徒唯恨偏僻^⑭之民不可口喻。頗有死於痘者是余所以慨然^⑮弁之也。余平生書業囊曰、施術不論貧富、請來不問晴雨。亦唯為救患者焉耳。為人父母者能以余之心為心則全其所愛、而無復有憂也必矣。



『神内喬木文集』部分（神内家蔵）

注

- (1) 扁倉氏：中国伝説上の名医である扁鵲（へんせき）と倉公（そうこう）。
- (2) 惻隱之心：誰かの不幸を深く哀れんで悲しむ心。『孟子』にある。
- (3) 西洋医某：イギリスのエドワード・ジェンナー（一七四九～一八二三）。ジョン・ハンターのもとで医学の教えを受けた田舎の開業医だった。この時代、イギリスでは天然痘はしばしば流行していた。これに対する予防法としては十八世紀初頭に、天然痘患者の膿疱から抽出した液を健康な人間に接種するという人痘法がアラブ世界からもたらされたが、この予防法では接種を受けた者の二％は重症化して死亡するなど、危険を伴うものであった。ジェンナーが医師として活動していた頃には、牛の乳搾りなどをして牛と接することによって自然に牛痘に罹った人間は、その後天然痘に罹らないという農民の言い伝えがあった。天然痘に比べるゝと、牛痘ははるかに安全な病気であった。ジェンナーはこれが天然痘の予防に使えないかと、一七七八年から十八年間に渡って研究を続け、一七九六年五月十四日、ジェームズ・フィッブスというジェンナーの使用人の子である八歳の少年に牛痘を接種した。少年は若干の発熱と不快感を訴えたがその程度に留まり、深刻な症状はなかった。六週間後にジェンナーは少年に天然痘を接種したが少年は天然痘には罹らず、牛痘による天然痘予防法が成功した。一七九八年、これを発表し、その後、種痘法はヨーロッパ中に広がり、一八〇二年、イギリス議会より賞金が贈られたが、医学界はこの名誉をなかなか認めなかった。また一部の町村では、牛痘を接種すると牛になると言われて苦勞したが、接種を「神の乗った牛の聖なる液」と説明したと言われる。しかしその後の天然痘の大流行を機にジェンナーの種痘法は急速に普及し、彼は「近代免疫学の父」と呼ばれるようになった。その後天然痘ワクチンは改良されて世界で

『神内喬本文集』に見る幕末讃岐の医学

- 使われ、一九八〇年には天然痘の根絶が宣言された。
- (4) 天行：時節によって流行する病氣。はやり病い。
- (5) 千古：太古から現在にいたるまでの間。
- (6) 水野氏：詳細は不明。
- (7) 日野氏：日野鼎哉（ひのていさい）。
- 寛政九ゝ嘉永三（一七九七～一八五〇）五十四歳。
- 豊後湯布院出身。号は暁碧・蔭香。日野家は日田の広瀬家と縁戚関係にある。弟は葛民。鼎哉は親戚の賀来佐之と共に帆足万里・吉雄如淵・シーボルトに学ぶ。天保四年（一八三三）鼎哉は京都へ行き小石玄瑞に蘭方を学んで医院を開業。蘭方が話題になり、新宮涼庭・緒方洪庵と併称された。嘉永二年（一八四九）長崎の頼川雅之から痘苗を入手して牛痘接種を実施し、京都に除痘館を設立して種痘の普及に努めた。著作に『白神除痘弁』。弟の葛民は大阪道修町で広瀬旭莊・緒方洪庵・大和屋喜兵衛・小林安石らと種痘法を推進した。
- (8) 緒方氏：緒方洪庵（おがたこうあん）。「緒」の字は誤記か。
- 文化七ゝ文久三（一八一〇～六三）五十四歳。
- 備中足守藩士惟因の末子。名は章、字は公裁、初め三平と称し後に洪庵と改めた。父に従い大阪の藩邸に赴き、十六歳で中天遊について蘭方医学を学ぶ。二十一歳で江戸に出て坪井信道の門に入り苦學し、ついで宇田川玄真について蘭学を修めた。さらに二十七歳で長崎に赴き蘭医ニーマンに就いて学び、二十九歳で大阪で開業した。患者が多く集まり、またその塾に学ぶ者千人に及んだ。福澤諭吉・橋本左内・江馬天江・柏原学而らは塾生だった。江戸に召されて幕府の侍医となり、法眼に挙げられて西洋医学所頭取となった。日下部鳴鶴が頌徳碑を書いた。
- (9) 難波翁：後述。喬木の医学の恩師。
- (10) 足森侯：木下利恭（きのしたとしやす）

天保三〜明治二十三（一八三二〜九〇）五十九歳。

備中足守藩の第十二代（最後）の藩主。第十一代藩主 木下利愛の次男。母は山内豊策の娘。正室は二本松藩主 丹羽長富の娘。官位は従五位下。石見守。備中守。幼名は三之丞。明治期には子爵に列せられる。養嗣子に、大正時代の歌人として有名な木下利玄がいる。弘化四年（一八四七）、將軍 徳川家慶に拝謁した。同年父 利愛の隠居により家督を継ぎ、従五位下備中守に叙任した。慶応四年（一八六八）、上洛し、明治新政府支持の姿勢を示した。戊辰戦争では、旧幕府軍にくみして函館まで転戦した板倉勝静の藩である備中松山藩の追討に参加した。同年、明治新政府に対し、陸奥信夫郡内の領地一万四千四百石余を備中国賀陽郡内に改めてもらうことを願う。明治二年（一八六九）、版籍奉還により藩知事となった。明治四年（一八七一）、廢藩置県により免官となる。明治十七年（一八八四）子爵となる。

(11) 叩其両端而謁：相手が要領を得ない質問をしてきても、その人が疑問に思っている点はどこかをよく聞いて、あらゆる角度から相手が納得のゆくまで説明すること。

(12) 権輿：物事のはじまり。起源。

(13) 翕然：多くのものが一つに集まり合うさま。

(14) 偏僻：かたよること。心がひねくれていること。

(15) 慨然：憤り嘆くさま。嘆き憂えるさま。

現代語訳

種痘論

人々が愛するものと言えは自分たちの子供であり、人々が心配するものと言えは天然痘以上のものはない。人が生きる限りこの病気からは逃げられないからである。そして症状が軽い者もその間は仕事をする事ができ

ず、また症状が重くなれば、中国伝説上の名医である扁鵲と倉公であつてもそれを回復させる方法を知らない。医術は小さな技であるけれども「仁術」、つまりは人を思いやる仕事である。また「惻隱の心」、つまりは誰かの不幸を深く哀れんで悲しむ心がなければならぬ。

ある西洋医は人の子供たちが天然痘で亡くなることを深く悲しみ、この治療法を長年研究した。偶然一匹の牛に、天然痘に似た水泡があつたのを採取してこれを人に植えてみた。すると自然に腫れてウミが流れ出て、やがてアバタになって収まった。軽い「はやり病い」程度のことで、それ以後は一生天然痘には罹らなかつた。後に四方の子供たちに種痘を施すことで、天然痘で死亡する者はほとんどなくなつた。歴史上今まで無かつた奇術である。この術が我が国に伝わつて既に十数年になる。そして、この術の専門家は水野氏・日野氏・緒方氏などである。緒方氏は私の恩師の難波抱節翁と親しく、度々この術のすばらしいことを難波翁に伝え使うように勧めたが、翁は信じなかつた。たまたま備中の足守藩主が緒方氏を招聘して藩内に種痘を施させた。その帰路に難波氏の処に立ち寄つて苦勞して勧め続けたので、難波翁はこれを試してみたところ、百発百中の効果があつた。そこで難波翁はこの術を称賛し、緒方氏もまた、あらゆる角度から詳細に説明した。

これが私の恩師である難波氏と種痘法の付き合ひの始まりである。また私がそれを受け取つて施術するきっかけとなつたこともある。多くの人々が長い間この術を疑つていたが、種痘の効果が出て天然痘に罹らない例が増えてくると、急にこれを信ずるようになった。するとつまらない偏見を持つていたことを後悔し、もう種痘法を批判することはできなくなつた。

私が種痘法の普及を主張する理由は、天然痘で死ぬ者が多いことをただ嘆いているだけである。私の薬袋には、次のような言葉を書いてある。

「医療を施すのは、貧富に関係ない。依頼を受けるのは、天候の良し悪

しに関係ない。医療活動とは、ただ患者を救うためだけに行うものだ。」人の父母の立場にある人々は、私の申し述べる心を自分の心とすれば、その愛する者を守り、また必ず苦しみを無くすことができるに違いない。

●天然痘が長い間日本人を苦しめ、種痘法がそれに対抗する画期的な妙法だと聞いてはいても、日本の文化と合わずになかなか日本人に受け入れられなかったが、一部の医学者たちの努力で徐々に普及したことがわかった。この際に医師たちの熱意の元になったのは、名誉よりは人々への「愛」の力であった。

2. 奉抱節難波¹ 先生

謙自貴塾来已二十年矣。未能一踵門²謝教授之恩、疎慢³之罪百喙⁴難辭。十数年前⁵賢子玄貞君⁶以種痘来吾讀、謙謁而請教。則授引痘略⁷一卷曰、「是家翁所撰、子能熟読之、於種痘之法思過半矣。」謙受而施之國中至今不絶。豈非吾先生之惠耶。近寓目⁸尊著散花新書。為書僅三卷。種痘之法瞭如指掌、実施術家不可一日無者也。仄聞先生著書卷帙柱屋蓋參閱者⁹賢子乎。所謂父作之子述之者可謂盛矣。世之医家固有好著作者率多未試而言之故不当実用。先生之撰異於是矣。曩者先生賜墨迹于謙曰、「方有定方而貴合宜法有常法而貴応変。」謙雖不敏常服膺焉。雖然未能窮方法將何以合其宜而応乎変。又曰、「有法之法為死法、無法之法乃活法。言法貴乎活用也。」抑如此者雖名家哲匠、亦或難之。況於謙之不学乎。請幸垂憐焉。謙馬齡¹⁰今四十¹¹矣。春愚仍旧¹²、嘗出遊拾得一石製図以似諸彦乞詩文採集已数十章矣。人或嗤之。是有故也。視古今成大業者、不惟其才学絶世亦由其先人有立之基。凡為人之父祖者誰不願其子之賢才。謙雖不敏今当此挙也。私心竊亦願之。故不顧一時之嘲、每聞有能文之士、從而求之東走西奔唯日不足。將欲貼之屏風以伝子孫也。子孫或因以興起者亦未可知焉。所謂刻鵠不成尚類鶩者¹³。將於此乎在伏願。先生及賢子慶齋¹⁴玄貞二君憐謙之頑如石也辱賜詞章何幸。加之拙文一首併呈聊以報洪恩之萬一也、。一苞¹⁵敬獻厨下¹⁶、

聊表芹忱¹⁷耳。時下稍冷。伏惟為道自重。

注

(1) 難波抱節(なんばほうせつ)：

寛政三(安政六(一七七一(一八五九) 六十九歳。



難波抱節肖像画
(東洋堂医院 松本一男氏蔵)

備前の人。本姓は篠野。名は経恭、諱は立愿、字は子敬。別号は鳩窠など。京都で吉益南涯に内科を、賀川蘭斎に産科を、また大阪で華岡青洲に外科を学ぶ。郷里の備前金川で開業し、乳癌・脱疽などの手術を行なった。学塾思誠堂を興した。緒方洪庵に種痘法を学ぶ。コレラの治療中に感染して死去。著作に『散花新書』(一八五〇)『産術弁』(一八五一)『胎産新書』(一八五五)など。

(2) 踵門・・・門に至る。実際に訪問する。

(3) 疎慢・・・考え方や方法が、大ざっぱでいいかげんなこと。

(4) 百喙・・・百叩きの刑。

(5) 十数年前・・・この文章を書いているのが安政五年(一八五八)であり、難波玄貞が讃岐に『引痘略』を持ってきたのは、その十数年前とある。十年前が嘉永元年(一八四八)であり、抱節著の『訳引

痘略』の出版されるのは嘉永三年（一八五〇）である。したがって、喬木の記憶が正しいとすれば、抱節の手元を経直から『引痘略』が届き、訳本を撰述していた最中の一八四五～四八年の間だったことになる。手渡した本が撰述中の写本であるか、あるいは「十数年前」という年数が、喬木の記憶違いであつただろう。

(6) 玄貞君・・・難波玄貞。（なんばげんてい）：

文政七～明治十一（一八二四～七八）五十五歳。

幼名は繁二郎、名は経徳、字は仲裕、立敬とも称し、号は西里。抱節の次男。医師の修業経歴は不明だが、父抱節のもとで研鑽した。抱節著の『散花新書』に「次男経徳、讃州高松に在りて、薬舗の一兒に種痘を施す。経過正しく善痘を發す」と記されており、抱節から種痘法を伝授され、旧門人の要請に応じて抱節の代理として四国に渡り種痘を行なった。『岡山県人名辞典』によると、「医は最も長技にして世人の推服せし所、殊に外科に委しく、常に詩書を好み、又之を能くす」とあるが、詳細は不明。

(7)

引痘略・・・清国の邱熹の著。日本には、中国式人痘種痘法が行われており、その後、トルコ式が日本で知られるようになった。遅れて、日本でも牛痘種痘法が行なわれるようになった。牛痘種痘法の伝播経路は三つあつた。一つはロシアからであり、これは北日本を中心に広がった。もうひとつはオランダからのもので、これは長崎から京都・江戸に広まり、そこから地方に伝わった。三つ目は中国からであり、弘化四年（一八四七）には邱熹の『引痘略』（一八三二年、清国刊行）の日本語版が二種類出版されていた。牛痘種痘法での予防接種が日本で本格的に実施されたのは嘉永二年（一八四九）であり、ジェンナーの発見から五十年近く経っているが、このように時間を要したのは、長旅と高気温のために牛痘苗の輸送が当初うまくいかなかったからである。難波抱節が得た『引痘略』は、次男の玄貞が

弘化元年（一八四四）に豊後日出の帆足万里に入門し、翌二年（一八四五）にそこで写本を作成し、それを抱節に届けたことに始まる。嘉永三年（一八五〇）にはそれを和訳した『訳引痘略』を撰述した。玄貞が喬木に渡した、抱節著の『引痘略』とは、この『訳引痘略』であつたと思われ、だとすれば、この渡した年も嘉永三年（一八五〇）であつたと推測できる。

(8) 寓目・・・目を向けること。注目すること。

(9) 服膺・・・心に留めて忘れないこと。

(10) 馬齢・・・これといったこともせずに、いたずらに年を重ねることを謙遜するという語。

(11) 四十歳：石図に文の書かれた作品（神内喬木石図寿言色紙）に「馬齢四十」「戊午初夏」とあり、この文章の書かれたのは安政五年（一八五八）であることがわかる。この年、喬木は名目上は数えの四十歳であるが、戸籍による本来の年齢は四十二歳だった。

(12) 仍旧・・・相変わらず。

(13) 刻鵠不成尚類鶩者・・・白鳥になれなくてもアヒルにはなれる。『後漢書』馬援伝からの故事。

(14) 賢子慶齋：難波慶齋（なんばけいさい）

文政元～明治十七（一八一八～八四）六十七歳。

幼名は敬哉、ついで立達・経直・誠翁。明治三年（一八七〇）、父の名「立愿」を襲名。号は東里。備前御津郡金川村に抱節の長男として生まれる。幼時より家塾で学んだ後、大阪の吉益南涯に医術の基礎を学んだ。天保二年（一八三一）、華岡青洲の春林軒塾に入門、外科を修業した後、京都の賀川蘭斎に産科を学んだ。続いて大阪の藤澤東暎に漢学を学び、さらに博多の儒医 亀井昭陽にも漢学を学んだ。弘化元年（一八四四）、豊後日出の帆足万里の塾に入った。帰郷後、金川で抱節の助手として診察に協力し、塾では代講などをし、門人

らとともに学理並びに外科の特技を磨いたものと考えられる。弘化五年（一八四八）、銀三枚二人扶持で表小姓侍医を命ぜられ、以後増銀二枚を給された。この時、岡山へ出仕し、家老日置氏の侍医を勤めたであろう。古谷道庵の嘉永五年（一八五二・慶齋三十五歳）の日記では、既に岡山城下の船着街に居を構えていることがわかる。慶齋著『外科小補』には、麻酔薬麻沸散を用い、自ら治療、手術した症例がたくさん記されており、卓越した技量を持っていたことがうかがわれる。安政六年（一八五九）、抱節の死去で家督を相続、九人扶持、格式勤向は旧の如くと申し付けられた。

(15) 一苞……土地の産物。土産物。

(16) 厨下……台所。

(17) 芹忱……芹は物を人に贈る時の謙辞。忱は真心。

現代語訳

私が難波抱節先生の塾から戻ってきて既に二十年になります。しかし塾を再訪問して、教授していただいた恩に感謝することがいまだに一度もできません。大雑把なことの罪は、百叩きの刑も免れないからです。

十数年前には先生の賢い次男の玄貞君が、種痘法を持って讃岐に來られて、私はお会いして教えを請いました。すると『引痘略』一卷を私に下さって、「これは父の書いたものです。あなたがこれを熟読すれば、種痘法はほとんど理解できるでしょう。」とおっしゃいました。私はそれを受け取って、種痘法を讃岐中に施し、今に至ってもその治療は絶えずに続いています。これはわが難波抱節先生の下さった恵み以外の何物でもありません。

最近注目しているのは、先生の素晴らしい著作『散花新書』（嘉永三・一八五〇年刊行）ですが、わずか三巻だけで、種痘法が手の平の上にあるかのようにはっきり理解でき、実際に種痘法を施す医師は一日たりともこ

れ無しにはいられません。もれ聞くところでは、先生の著書の完成までには二人の賢い二人のお子様が参与されているとか。いわゆる「父が成して子が述べる者は盛ん」なものではないでしょうか。世の医家で好著と言われる本の作者は、おおむねそれを実際には試さず、口先で述べているだけなので、実用には適しません。しかし先生の著作はそれとは全く異なります。以前、先生は私に良い言葉を書いた書作品を下さって、こう言われました。「特定の決まった合理的方法を持ちながら、同時に臨機応変に対応しなさい。」私は更に質問しました。

「私は優秀ではありませんが、常にこれを心に留めて忘れないでいます。しかしいまだにそれを究めることができません。どうしたら合理的にしても臨機応変でいられるでしょうか。」それに対してまた言われるには、「固定化した法というのは死んでいる法であり、固定化していない法は活きている法である。尊ぶべきは活きている法である。」

そもそも、このようなことは名人でも難しいことです。まして不学の私のようなものはおさらです。これといったことを成し遂げずに既に四十歳になって、相変わらず愚かなままの私を憐れんで下されば幸いです。

かつて旅に出て一つの石を拾いそれを図に描いて、文人たちに頼んでそこに詩文を書いてもらい、そうやって集めたものが既に私の手元に数十枚あります。人はあるいはこれを笑うでしょう。しかしこれには理由があるのです。

古今の大きな仕事を成した人々を見れば、その才学が絶世だったばかりでなく、またその親の教育が基礎を作っていたからということが多いのです。およそ人の父祖たる者で、その子供が賢くなることを願わない者がいるでしょうか。私がしつかり者ではないといってもやはり同じことで、秘かに子供が賢くなることを願っています。だから一時の嘲笑をも顧みず、文章の上手な人物がいると聞けば、その人のもとに出掛けて、良い文章を書いていただくことを求め、東奔西走するのに時間が足りないほどです。これらの文章を屏風に貼って子孫に伝えようとしたのです。私の子孫はこ

れによつて有名になつた者が、今のところはまだいません。いわゆる「白鳥を彫ろうとして白鳥にならず、なおアヒルに類するに過ぎない」です。でもここに至つてなお伏して願うのは、先生と、慶齋・玄貞のお二人の優秀なお子様達が、私が石のように愚直で頑固なのを憐れんで、かたじけなくも何かお言葉を書いて下されば、なんと幸せなことでしょう。そのお言葉に加えて、私の拙い漢詩を一首、我が家で並べて飾らせていただければ、これで私が頂いた大きなご恩の、わずか一万分の一程度を報いることになるのではないかと思っています。

なお、台所で使っていただく讃岐名物の食べ物を一包お送りします。少しばかりの私の気持ちです。このところやや冷えますので、どうか大切な医学の道のために呉々もご自愛下さい。

●これは、安政五年（一八五八）、喬木四十二歳の時、二十年前の医学の恩師である難波抱節に産物を送る際に付けた書簡である。抱節はこの翌年の安政六年（一八五九）八月に没している。文章は記憶を頼りに書いているので、年代のずれが多少あるが、種痘法と痘苗が難波抱節の次男の玄貞経由で神内喬木に伝えられ、喬木がそれを讃岐に導入し始めたのは、全国各地に種痘法が伝えられ始めた嘉永二年（一八四九）の翌年、嘉永三年（一八五〇）の二、四月頃であろう。

3. 奉片山先生^① 呈某氏

不接芝眉^②有日矣。不審雅候如何頃遣児請種痘分苗吾兄^③。杲踐前諾為一煩乎。既至期濯膿^④則轉種焉。微吾兄之惠何以得之。感荷^⑤不已。僕窃謂、「世医動輒口仁術、然視其所為大抵皆不以医為意、唯利之趨。豈仁之云乎哉。」今夫種痘不多假藥力貧医如我輩猶能為之、而令終身無後再患。此其為術稱之曰仁。誰敢非之。但僕疎懶^⑥比年^⑦使吾兄獨勞感作無已。庶幾自今以往、將有嗣統以補吾兄之闕焉。請幸恕之、々々々々。敬獻厨下。笑留幸甚。内相及令孫無恙^⑧煩一致意。

注

(1) 片山先生：片山冲堂（かたやまちゅうどう）
文化十三（明治二十一）（一八一六（八八））七十三歳。



片山冲堂肖像画
（データのみ片山和平氏蔵）

讃岐高松の生まれ。名は達、字は元章、通称は直造、別号は六石。詩文共に能くし、特に文章に優れていた。昌平覺で古賀侗庵・謹堂らに学び、帰藩後に大阪で藤澤東暎^②・奥野小山に学ぶ。高松に帰り藩校講道館助教となる。藩政刷新によつて議事局判事・参政試験となる。明治四年（一八七一）には講道館督学となった。翌年、学制施行で講道館が閉校した後は、盍簪社（こうしんしゃ）を開いて子弟の教育を行なった。門人中、赤松棕園・三土梅堂・久保羅谷・渡辺橙斎・植田南畝・黒木欽堂・長尾雨山等が有名である。著には『高松藩記』『平賀源内伝』など。喬木は片山冲堂に嘉永五年（一八五二）頃から文を学んだらしい。

(a) 藤澤東暎（ふじさわとうがい）：

寛政六（元治元）（一七九四（一八六四））七十一歳。
讃岐香川郡安原村の生まれ。名は甫、字は元発、通称は昌蔵、別号は泊



藤澤東咳肖像画 嗒然写
(高松市塩江美術館蔵)

園。幼少から学に志し、中山城山に学び、二十三歳で長崎に遊学。文政二年（一八一九）、高松福田町で私塾「守泊庵」を開いた後、文政七年（一二四）大阪に出て、翌八年（一二五）に「泊園書院」を設立、「原聖志」「思問録」などを著わして名声は天下に高く、大阪在住のまま高松藩士となった。古文辞学に精通し、尊王の志が厚かった。元治元年（一八六四）、將軍家茂と二条城で会見し、幕府儒員になるように命ぜらるも辞した。子の南岳が書院を大阪最大の私塾に発展させた。

(2) 芝眉・・・他人の顔を敬つていう語。お顔。

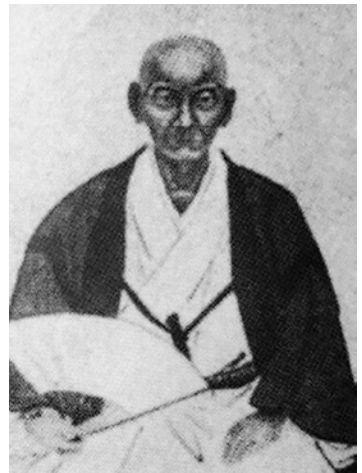
(3) 吾兄：喬木が冲堂の紹介を得て、種痘の分苗をさせてもらった人物である。片山冲堂の知人で、種痘法に最も努力した者といえば、柏原謙好であろう。謙好と冲堂は両者とも藤澤東咳の門下である。柏原謙好への礼状を片山冲堂に託したのである。また神内家には、謙好の息子の謙益が喬木の還暦を祝った作品も保管されている。後に喬木の二人の息子も藩校講道館で柏原親子に医学を学んだ。

(b) 柏原謙好（かしわばらかねよし）：

文化五～明治六（一八〇八～七三）六十六歳。

讃岐の人。本姓は鴨、名は毅、字は玄弘。柏原元厚の長男。文政二年（一二九）、十二歳で阿波に行き、柴野碧海に漢学を学び、天保十

『神内喬木文集』に見る幕末讃岐の医学



柏原謙好肖像
(柏原家蔵)

年（一八三九）、二十二歳で長崎に行き、シーボルトに学び、傍ら牛痘種痘法を研究した。更に大阪で藤澤東咳に経史を学んで開業。嘉永二年（一八四九）、オランダ商館の医師モーニッケがもたらした痘苗を使い、郷里の讃岐で初めて種痘を実施。翌年高松藩医となり、維新後は高松病院種痘局長を勤めた。墓碑は片山冲堂撰文。

(c) 柏原謙益（かしわばらかねます）：

文政十～明治二十九（一二七～九六）七十歳。



柏原謙益肖像
(柏原家蔵)

高松市屋島西町に柏原謙好の長男として生まれた。名は謙益、字は遜卿、号は櫓丘・松江、俳号は白鷗、その亭は双松園と名付けた。

文を片山冲堂に、医学は初め山川孫水、高松藩医の谷本雲斎・但馬来山に学び、ついで大阪で緒方洪庵に学び、帰って藩の奥医師となった。讃岐で一番最初に人体の解剖をし医学の基礎を作った。維新以降、『明七義塾』を興し、『明七雜誌』を刊行し、医師を養成した。著書に『更老篇』『温泉考』『虎列刺病療法』などがある。

- (4) 灌膿……種痘法の治療段階の一つとして使う言葉。菌を植えてから数日して、肌に来た小泡の中の液体が変化して膿の状態になること。
- (5) 感荷……感謝してめぐみを受けとること。
- (6) 疎懶……無精なこと。怠けること。また、そのさま。
- (7) 比年……年々。毎年。
- (8) 恙……病気などの災難。わずらい。

現代語訳

片山先生に託して、某氏に差し上げる

先輩にお会いしなくなつてから多くの日が経ちましたが、その後いかがお過ごしでしょうか。先日、私の幼児を派遣して、種痘の分苗を先輩にお願いしました。前に約束したことを実践するのは大変だったでしょう。それから予定の期日が過ぎて、水泡内の液体が膿になつて次の種痘法に使える種に転じました。先輩のお恵みが無かつたら、どうしてこれを得ることができたでしょうか。感謝の気持ちは止まりません。私が秘かに思っているのは、次のようなことです。

「世の中の医師はともすれば『仁術』の言葉を口にするけれど、その行為を見ればたいしては皆、医学を心の術と考えず、ただ利益を追い求めるだけである。どうして仁といえるだろうか。」

種痘は、薬の力を借りることがありません。私のような貧しい医師でも、これをうまく実施すれば、人が一生涯天然痘に罹らないようにできるで

しょう。このような医学を本当の仁術と言うのです。これを誰も否定できません。ただし、私は無精者なので、毎年、先輩にご苦勞をお掛けすることになつてしまうことは、どうしようもありません。

今から以後は先輩の後を嗣ぐ人ができて、その仕事を補つて下さることを願います。こんな生意気な言葉をお許し下さい。本当にお許し下さい。先輩を尊敬して、台所に食べ物を献上します。ご笑受されれば幸甚です。末筆ですが、奥様およびお孫様もお元気でいらつしやいますように、お祈り申し上げます。

●文集中の書簡の控えは片山冲堂に送つたものが最も多く、喬木と冲堂の親しい関係がよくわかる。実は、冲堂は喬木よりわずか一歳年上に過ぎず、恩師というよりはむしろ仲の良い先輩で、悩みの相談に乗つてもらうアドバイザー的存在だっただろう。この書簡の内容では種痘を実際に受けて牛痘ウイルスを保管するために、喬木が種痘所まで自分の幼い子供を妻に抱かせて歩いて往復させたことがわかる。この子供は次女のシゲである。妻や幼児に苦勞させたことによつて、喬木は周囲の人々から批判を受けたそうである。(神内國榮氏が以前、親から聞いた話)。痘苗は通常は患者の発疹の「かさぶた」を使うが、乾燥しすぎるとダメになることも多く、天然痘に罹つたことのない元気な幼児の体に、植えた状態で移動するのが確実であつた。喬木は批判を受けることも承知で行なつたのである。

4. 暴病論

客歳戊午^①之秋、諸州大疫^②死者相枕。其症暴吐暴瀉^③手足厥冷^④。急者朝発夕死、緩者不過数日。或曰是霍乱^⑤或呼為狐狼痢。蓋是歲夏月雷聲、発土鬱^⑥殊甚所以有此疾也。今夏有雷而復有此疾者何也。蓋雷之発在大暑^⑦之前。七月以後残炎如燬無復雷声加之。歳次己未^⑧土鬱未開、陽盛陰微。其有此疾不亦宜乎。民俗不如此理。凡有疑似之症猶且不請医治之。乃趨巫^⑨之庭而祈禳^⑩焉。或有四支痛者不論禁宜、輒隨其痛處縛而刺^⑪之、為之死

者。亦不為不多。民俗之愚不必深咎焉。為医者亦或倣之、可笑之甚也。抑古亦有之曰虎狼病言。其暴惡¹²如虎狼之齟齬¹³也。蓋霍乱之一種耳。或有四支發紫泡、刺之而愈者此則疔毒¹⁴矣。不宜混淆。夫為医者憤々¹⁵如此、而民俗或知之。豈天令人言乎。抑有良医者而言之也。但惜不詳其症。妄以狐狼呼之、亦可笑耳。則其請巫祈禳、及不論禁宜刺其痛所者又何恠焉。抑亦為医者之罪矣。古云医者意也¹⁶。用心於術之謂也。医而不用心於術其謂之何。夫巫事神者医治病者其業各異。故古先聖王使分職而至焉。今乃混之者雖民俗之愚乎、亦由医之魔字耳。可不戒哉、可不戒哉。

注

(1) 客歲戊午……安政五年(一八五八)

(2) 大疫……おそろしい伝染病。ここではコレラのこと。コレラは日本では文政五年(一八二二)に朝鮮半島、対馬を経由して本土に入り、初めて全国的に流行した。安政五年の流行は、日本開国後に長崎港に入った米軍艦ミシシッピー号の乗員から伝染したものとされる。この時に江戸だけでコレラで三万人以上の死者が出た。翌年の安政六年(一八五九)の六月から九月にかけて再度流行したが、前年よりも死者は少なかった。ポンペの指導によって少しずつ治療法が進んだのである。

(3) 暴吐暴瀉、手足厥冷……コレラの症状の説明。二三日の潜伏期間の後、下痢と嘔吐で突然発病する。米のとき汁のような大量の下痢便が何回も出て、急激に体液を失い、脱水症状が現れ、体温が低下する。眼球が陥没し声がかすれ、皮膚がしわしわになり、さらに進行すると意識障害やけいれんなどが見られ、死に至る場合がある。

(4) 厥冷……末端から中枢部に向って冷えること。逆冷ともいう。漢方医学用語。

(5) 霍乱……もがいて手を振り回す意味の「揮霍撩乱(きかくりょうらん)」の略で、日射病や暑気あたりのこと。江戸時代には夏に起こる激しい吐き気や下痢を伴う急性の病気を言った。

(6) 土鬱……五行思想では、「土気」は一つの季節を減じ次の季節に転換する強い作用を持ち、各季節の終わりの十八日間に配当されて「土用」と呼んでいる。古来その期間中の建設や動土をタブーとし、健康にも留意した。「土用の丑の日」の鰻食も、平賀源内がこれにちなんで発案したものである。漢方医学の五行思想では脾臓が五行の「土」にあたり、脾鬱・腸鳴も土鬱の一種とされる。喬木は天の土気が発散するのが雷の音「ゴロゴロ」だと考え、雷音がなくて発散できずに、天が鬱状態になって、それが人間の腸の「ゴロゴロ」の音によって発散していると考えている。東洋思想では宇宙と人間は連動しているとされている。

(7) 大暑……二十四節気の一つ。元来、旧暦の六月後半のことで、太陽の黄経が二〇度に達した日(太陽暦の七月二十三日か二十四日)に始まり、立秋(八月七日か八日)の前日までの約十五日間であるが、現行暦ではこの期間の第一日目を指す。

(8) 歳次己未……安政六年(一八五九)。十干では戊(つちのえ)・己(つちのと)が、十二支では、子・丑・午・未が五行の土を表す。つまり、この年は干支が両方とも「土」の行である。

(9) 巫……呪術師・シャーマン・巫女・神官など。

(10) 祈禳……祈禱して幸福を求め災厄をはらうこと。

(11) 刺……「拉」と同意。肉・皮・ガラス・豆腐などに刃先をスッと滑らせて切ること。切り開く。切り落とす。裂け目を作ること。

(12) 暴悪……乱暴で道理を無視していること。

(13) 齟齬……噛みつくこと。

(14) 疔毒……皮膚病。

(15) 憤々……乱れる様子。

(16) 医者意也……亀井南冥の遺訓にあるが、本来は漢籍にある言葉と
思われる。出典の詳細は不明。医術には心が必要である、という意味。

現代語訳

恐ろしい病気に関する論

昨年、安政五年（一八五八）の秋、日本全国各地に大きな伝染病があつて死者がたくさん出た。その症状はひどい嘔吐と下痢、そして手足が冷たくなることである。急な者は朝に症状が出て夕方には亡くなり、緩やかな者も数日間て亡くなる。この病気をある者は「霍乱（かくらん）」と呼び、ある者は「コロリ」と呼ぶ。

思うに、この年の夏には雷の「ゴロゴロ」という音がせず、土気が発散されない鬱状態である「土鬱」になったことが、この病気の発生した理由であろう。しかし今夏は雷が発生したのに、またこの病気が発生したのはなぜだろうか。思うに、雷が旧暦の六月後半の「大暑」の前に発生し、七月以後は残暑が体を焼くようにひどく、雷の音もなかった。その上、今年、安政六年（一八五九）の干支は「己未」で五行の「土」が重なっている。「土鬱」はまだ開放されず、陽の気が盛んで陰の気はかすかである。このような時だからこそこの病気が現れたのも当然ではないか。

民衆の習俗は陰陽五行のこの原理にさえも及ばない。多くの人はこの病気の症状に類する患者が出ると、医師の治療を受けるのではなく、神官のところに行って祈祷を受ける。また手足の痛みが有る者は、治療法を考える前にその痛みの箇所を縛ったり切ったりして、時に死に至ることがある。ほとんどそうしてしまう。このような民衆の愚かな習俗は必ずしも深い罪にはならない。しかし、医師たる者がこれを真似したら、ひどい笑いものである。

そもそも昔もまたこれに近い病気はあった。「虎狼病」と言うのは、そ

の乱暴で道理を無視している様子が虎や狼が噛むようだといいるところからきた名であるが、思うに「霍乱」と言われる、夏に起きる暑気当りの一種だけである。あるいは手足に紫の泡を発することがあり、これを切つて治る場合は、つまりは皮膚病である。今回の伝染病をこれらと一緒に考へてはいけない。だいたい医師と呼ばれる者のレベルの低さはこんな感じであつて、民衆の習俗の方があるいはこの病気の症状を知っている場合さえある。どうして天は人にそれを言わせないのであるか。

そもそも、医学をきちんと勉強して治療する医師がこれを言うことができるが、ただ残念なことにその症状に詳しくなくて、みだりに「狐狼」のような名でこれと呼んでいる。まったく笑つてしまう。だから神官に祈祷を頼んだり、治療せずにただ縛ったり切ったりしてしまう者がどうしてそれを怪しむことができようか。またこれも医師の罪であると言える。

昔から「医は意である」と言われている。それは医術に心を用いる意味である。医師であつて医術に心を用いなければ、本当の医師とはいえない。神官として神に仕える者、医師として医術を行なう者、その仕事はそれぞれ内容が異なる。だから昔の聖王がその職を分けさせることになったのである。今になってそれを一緒に行なっている者がいるということは、愚かな民俗であるのは確かだが、同時に医師の不勉強でもあるのだ。しっかりと戒めなくてはならないよ。

●天然痘が種痘法で解決して以後、日本中の医師を最も悩ませた伝染病はコレラであり、その対処に苦しんだ。明治時代になつても何度か大きな流行があつて多くの人命が失われた。西洋医学による治療法が徐々に功を奏して現在ではほとんど解決している。喬木は本来が漢方医であつて、漢方の知識が極めて豊かであるが、それに対する限界にも直面して常に新しい医学を勉強しなければならないという意識を、天然痘やコレラとの格闘の中から獲得していった。それを最終的には子供たちに託し、由己の大学東校への入学につなげていった。喬木の医学に対する真剣さが

にじみ出ている文章である。

5. 与長尾子徳^①

不接奉数十年矣。未審吾兄文候何似。謙於為人其謂之何。前者託吾冲堂先生乞寿言。幸不棄不肖有詩章之賜。洋洋乎大雅之音哉。吾兄之惠及故旧如此。然而謙未得一踵門牆^②申謝。可謂懶慢之甚矣。聞吾兄客歲^③春祇役^④京師九月而歸。今年孟春^⑤藩府加爵一等褒之。衆人皆將接踵相賀。謙窃以為未足賀也。何則^⑥才如吾兄學如吾兄技術文章如吾兄而未滿医員。蓋有司^⑦之不明乎。將吾兄不欲之也。又以為使吾兄在医員、則志有所屈而業不得遂焉。故將待其大展驥足^⑧于郷。然後拏而用之也、由是觀之令吾兄之業不朽于千載者、藩府之惠亦大矣哉。而乃父元章先生^⑨亦必含笑地下。謙所以賀吾兄者、將於是乎。勉哉^⑩吾兄、勉哉吾兄。京扉二柄表其心。時下云々。

注

(1) 長尾子徳（ながおしとく）・・・

天保八年頃～明治三十餘年。（一八三七頃～一九〇〇頃）六十餘歳。



長尾子徳 肖像画
『奚疑堂詩集』より転載

名は裕・益吉、字は元益・子徳、号は鷲岳。高松藩侍医 長尾元章の

『神内喬本文集』に見る幕末讃岐の医学

三男。山口舜海（佐藤尚中）^(a)に医学を学び、片山冲堂に詩文を学ぶ。晩年、釣遊を楽しみ、その詩を印刷し『奚疑堂詩集』という。喬木よりも二十歳ほど年下である。

(a) 佐藤尚中（さとう たかなか）・・・

文政十～明治十五（一八二七～八二）五十六歳。



佐藤尚中肖像（順天堂大学蔵）

下総国小見川藩医の山口甫僊の次男として生まれる。幼名を龍太郎、舜海と称し、笠翁と号す。江戸四谷の安藤文沢に蘭方医学を学ぶ。文沢の勧めで和田泰然（のちの佐藤泰然）の「和田塾」に入門。さらに佐藤泰然の養嗣子、佐倉藩医となり、順天堂第二代堂主となる。長崎で一年余りボンベにオランダ医学を学び、順天堂医院の初代院長、大学東校初代校長を歴任した。

(2) 門牆：門と垣。転じて、家の出入り口。

(3) 客歳：昨年。

(4) 祇役：謹んで主君の命令にしたがう。この場合は藩主に同行する。

(5) 孟春：一月。

(6) 何則：なぜならば。

(7) 有司：役人。官吏。

(8) 驥足：「驥」は足の速い馬の意。すぐれた才能。才能の優れた人。

- (9) 元章先生：長尾元章……元治一（？）一八六四）。名は元章、通称は杏斎、高松藩医。業の暇な時に漢詩をよく作った。日柳燕石の友人。子が子徳。

- (10) 勉哉：がんばれ。

現代語訳

長尾子徳に与える

お会いしなくなつて数十年になるでしょうか。手紙のやり取りもしていないので貴殿の文章の調子がいかがなのかもよくわかりません。わたくし謙の、人としての責任はいかがなものでしょうか。先般、私が学んでいる片山冲堂先生を通じて貴殿の寿言をお願いしました。幸いにも私を見棄てず、漢詩を下さいました。この漢詩はスケールが大きくて上品な作品です。貴殿が旧知の人々にも大きなお恵みをもたらす一例を示しています。しかし私はいまだにお宅にうかがつて実際にお礼を申し上げることができていません。ひどい怠慢と言うべきです。

聞けば貴殿は、昨年の春公務で京都に出張され、九月に帰られたそうですね。今年四月、高松藩役所は貴殿に地位一等を加えてこれを褒賞されました。多くの人々が皆、長尾家を訪問してお祝いを申し上げていました。しかし私は秘かに、まだそれは祝うほどのことではないと思っています。なぜなら、貴殿ほど才能が高く、学力が高く、技術文章が高い人なのに、いまだに藩医になっていないからです。それを審査する藩の役人の目は節穴ではないでしょうか。いいえ、おそらくは貴殿が今は藩医になりたいと思つておられないのでしょうか。また、もし貴殿を早く藩医に登用してしまつたら、志はそこで終わつてしまひ、その先の業績を遂げることができないことを心配するためではないでしょうか。だから、貴殿がさらに医学の勉強を發展させることを待っているのです。その後に、貴殿を推挙して藩医

にし、それによつてその業績を千年後にも不朽に伝えるつもりなのでしょう。藩役所の恵みはなんと大きいものでしょう。そうなればきっとお父上の長尾元章先生もまたお墓の下で微笑むことでしょう。私が貴殿を祝うのはまさにその時です。がんばれ長尾君、がんばれ長尾君。その気持ちを表すために京都の扇二本をお贈りします。最近ハ……。(末文を省略)

●この文章は長尾元章が没した元治元年（一八六四）以降に書かれたものである。喬木と元章は医師友達であり、喬木は子徳に初めて会つたのは、子徳が幼少の時だった。この文章には亡き友人の子供の成長を暖かく見守る喬木の優しさがにじみ出ている。子徳は高松藩のエリート医学生であつて、順天堂の佐藤尚中に学んでいる。これによつて高松藩と順天堂の縁ができたわけである。明治十六年（一八八三）に建立された東京谷中霊園の佐藤尚中顕彰碑の碑陰にも、長尾子徳からの寄付の記録がある（『写真で見る順天堂史一七五年の軌跡』六十五頁参照）。佐藤尚中は明治二年（一八六九）、大学東校に出仕して大学大博士（学長）となり、明治五年（一八七二）まで同校を主宰した。後に神内由己が明治四年（一八七一）に大学東校進学後に佐藤尚中に学ぶ時点で、長尾子徳の話題も出ただろう。これが後に由己が順天堂とも関連の深い林家から、妻を迎えるところにつながつていくように思える。

まとめ

この研究に関わるようになってから、日本の医学史の文献を多く読んだ。幕末の種痘法導入に関しては、数年前に阿波藩医の井上春洋の著である『亜墨竹枝』の解説を行なつた際に詳しく研究しておいたことが大いに役立った。過去の日本人は私たちが想像している以上に天然痘に苦しんでいたことがわかる。それが「種痘法」という一つの西洋技術ですべて解決したことは、近代国家の發展に大きく寄与した。しかし、種痘法の導入に当たつ

ては、人々の心理的抵抗もあり、それを普及した医師たちの苦労は並大抵ではなかった。彼らは医師としての強い使命感をもってそれを推進した。その一人が神内喬木である。文集の中にも、彼の高邁な思想は散見する。これまで、神内喬木が種痘医だったことは全く知られていなかった。またそれが備前金川の名医である難波抱節からもたらされた技術であり、抱節はそれを緒方洪庵から学んだことも、この文集によって初めてわかったのである。

讃岐では古来より多くの文明は瀬戸内海を通じてやってくる。瀬戸内海は海産物の宝庫であると同時に、文化伝播の道でもあった。関西圏に隣接する備前は讃岐とは一衣帯水の場所である。抱節の次男は、瀬戸内海を通じてそれを四国にも伝えた、現代のスピードリーな交通手段に比べれば極めてゆっくりした船の動きも、時代や人口の違いを考慮すれば、速い情報伝達だった。近世の医師は大きな意味では儒学者の範疇に入り、多くの医師はまずは漢学を学んだ。東洋医学の教科書は漢文で書かれ、薬品名の多くも漢語であったからだ。この種痘法伝播の事実は、同時にこの地域の近世の学芸全体の伝播経路の一つを示している。

また、日本の近代史を考えた時に、種痘法の導入は、本格的な西洋文明導入の嚆矢だったといえよう。江戸の種痘所は東京大学の基礎になり、日本各地に作られた種痘所も後に西洋文明の普及の中心地となった。高松の種痘所を経営した柏原謙好・謙益親子は、幕末から藩校・講道館の洋学教授も兼任し、多くの若者に新たな学問を伝えた。喬木の二人の息子も、最初はこの親子から洋学を学んだ。喬木は本来は東洋医学者であり、しかし息子たちには積極的に西洋医学を学ばせた。伝統を守りながらも、時代の最先端の良いものは積極的に取り入れる柔軟性を持っていた。時代の大きな転換点での人間の在り方の手本である。

今は「新型コロナウイルス感染症」という新たな病気と、人類全体が闘いを続けている最中である。過去に天然痘やコレラと闘った神内喬木の文

章に現れた彼の思想は、我々の大きな参考になる。それは、「医療というのは、ただ患者を救う事だけを考えて行ない、大きな愛にあふれた仁術でなければならぬ。医師は基礎技術を重視しながらも、同時に臨機応変の柔軟性も持たねばならない。」というものである。

また喬木は「文学」の力をよく知っていた人物である。四十歳の時に珍しい形状の石を拾って、画家に絵に描かせ、多くの優秀な文人にそこに寿言を書いてもらうために奔走した。文集を読むと、その目的は、その寿言を屏風に貼って、子供の教育に役立てるためであった。彼は教育に熱心であり、また良い言葉が人を育てる効果をよく知っていた。この寿言の色紙類の一部が現在も神内家文書内に残っているのが嬉しい。それを集める苦労はその後、彼に胃の持病を背負わせることになるが、実際に彼の子供たちは立派に育つ。二人の娘は地元の名家に嫁ぐ。長男の堅爾は一時期藩医・谷本氏の養嗣子となるが、後に兵役を経て実家に復籍し神官となる。次男の由己は大学東校（後の東京大学医学部）に進み讃岐初の医学士となって、大阪府立病院副院長・大阪医学学校長（後の大阪大学医学部長）や熱海浴場医長として活躍し、二冊の著作も遺した。残念ながら結核で早世するが、彼が林洞海の娘と結婚して、近代日本医学の中核の人物たちと姻戚関係になったことは、後の神内家の人々に大きな自信を抱かせた。

なお、神内喬木文集の半分以上は、自らが送った書簡文の控えである。文学の恩師である片山冲堂や知人に多くの手紙を送っている。彼は人との交際にたいへん気を使う人物だったことがわかる。

喬木がこのように文学に強い熱意を抱いていたのは、讃岐高松の地域性に関連があると考えている。高松藩は学問を重視した水戸藩の支藩であり、歴代の藩主も学問を重視した。高松藩出身の朱子学者である後藤芝山や柴野栗山はその影響を受けて、歴史や書道の研究にも熱心だった。また喬木の住んだ地域の隣の香南地区には古文辞学を研究する中山城山がいて、晩年に『全讃史』を編纂して、それは現在も香川県地方史研究に寄与してい

る。城山門下の藤澤東岐は大阪に出て泊園書院を開き、豊かな蔵書を準備して多くの塾生を育てた。この東岐に大きな影響を受けたのが高松藩儒の片山冲堂であり、冲堂から漢文を学んだのが神内喬木である。冲堂の多くの優れた門下が近代香川県に進出者になった。改めて考えると、医学に関して喬木に大きな影響を与えた難波慶斎と柏原謙好も東岐の門下であったから、喬木も泊園書院の学統の末端に位置する学者であったといえる。

一人の優秀な人物が生まれてくるには、必ずそれを育てる環境や教育者が必要である。このような素敵な文集を編むことができた神内喬木が誕生するためには、近世に「文の国」と呼ばれた讃岐の高い文化の蓄積があった。

神内喬木の文章は、漢文を現代語に直して読んでみれば、構成がしっかりといて理解しやすく、表現力も極めて高いことがわかる。文学の力をよく知る彼はこの文集を、後に出版するつもりでまとめておいたが、その前に命が尽きてしまった。通常そのような場合は、門下や家族が遺稿集として出版することが多いのだが、神内家ではその余裕もなく、年月だけが過ぎてしまったに違いない。遺稿は彼の没後、百二十七年の時を経て世に出ることとなった。

今回は医学に関係した文章のみを紹介したが、これ以外の文章も興味深い内容が多く、これらによって讃岐の地方史に関わる事実がいくつも解明された。今後も機会があれば紹介していきたい。人間が文字によって自分のイメージを時空を超えて伝え、その集合体である文章によって社会に影響を与え、進化させていく技術を発明した。それが文学である。どんなに機械文明が進歩しようとも、文学はそれを取り込みながら、今後も社会に影響を与え続けることだろう。

なお、本研究は多くの皆様や機関からの資料提供を受けると共に、日本学術振興会科学研究費の支援を受けている。それは基礎研究(C)「近世後期讃岐・阿淡の書道文化―儒学者のかかわりを中心に―」(研究代表者：太田剛 課題番号 25370122)、基礎研究(B)「泊園書院を中心とする日本漢学の研究とアーカイブ構築」(研究代表者：吾妻重二 課題

番号18H00611)である。また本研究の内容は、四国大学学際融合研究所での研究活動の成果として得られたものである。

主な参考文献

- 『幕末讃岐の種痘医 神内喬木文集』太田剛 神内國榮刊 二〇二〇年
 『讃岐医人伝 ―合田求吾から柏原謙益・神内由己まで―』高松市歴史資料館 二〇一五年
 『讃岐の医学と蘭学』西岡幹夫 美巧社 二〇一九年
 『讃岐医人伝』31 佐々木礼三 『香川県医師会誌』第16巻第4号
 『改訂改補 讃岐人名辞書』梶原竹軒監修 藤田書店 一八七三年
 『讃岐人物風景』9巻 四国新聞社 大和学芸図書 一九八二年
 『備前の名医 難波抱節』中山沃 山陽新聞社 二〇〇〇年
 『日本の医療史』酒井シヅ 東京書籍 一九八二年
 『病が語る日本史』酒井シヅ 講談社学術文庫 二〇一四年
 『写真で見る順天堂史175年の軌跡』学校法人順天堂 二〇一四年
 『伊東玄朴とお玉ヶ池種痘所』深瀬泰旦 出門堂 二〇一二年
 『五行循環』吉野裕子 人文書院 一九九二年
 『後藤芝山の書』太田剛 後藤芝山先生顕彰会 二〇一三年
 『柏蔭物語 柏原家家史(上巻)』柏原及也 実業之日本事業出版部 一九九八年
 『井上春洋著『亜墨竹枝』解説』太田剛 四国大学図書館研究誌『凌霄』第19号所収 二〇一四年
 『井上春洋著『亜墨竹枝余話』翻刻』太田剛 四国大学紀要人文・社会科学編第41号所収 二〇一三年